

古今著聞集

九

記和文

號 8 十

冊 20冊, 内

文庫





古今著聞集卷第九

武勇 第十一

武者禁暴戢兵保大定功安民和衆豊成是
武七徳也臨征我之場古死於一寸は振瞿傑之
勇賊名於万代蓋此道也

後海の天皇は八人のひつりまのせしむるを海に國行
老成を爲す爲すなり終のく内勇らうくゆをれん
官のそそ近由の耐成は海程よりおふしてか
程作を定佐してれえ耐成は中おより大なる
成く内勇らうかれりるをれん達長よりさり



古今著聞集

九

きりきぞて尸体て何る又白河流代と迷のどくよ海に
 てしふ勢がりしは「は」に「は」がたてたてて凡の
 せだん海にぞりきり作事ありを海の小系港の世の
 とこの人よてまを海にたてたててとてとてとて
 海にぞりあてくうらやくおぼゆか今ハまれが作事ごと
 「そち盗部ト少作事するをれさもわらん武士も人
 とだこのまてりをせがりまもどとてとてとてとてとて
 國の二系港ハ中流ひさの。お光部ト定夜は地ありさ
 て海にぞりお光部のあらくよりとれだ公明と役まて
 且今「そあてはむ」びきとてとてとてとてとてとてとて

とのひよりをれんお光部ト少作事酒のまてわら
 きお明なりをれん舞よへく且今足柄より遊べい作
 ことによりびおひ海に流は「は」といひをれんお光部
 へみきりお光部トるお光部の方とんやりくろをれだ
 事と一人のまてとてとてとてとてとてとてとてとて
 お光部よのまてとてとてとてとてとてとてとてとて
 何れなりとてとてお光部とていれ鬼向をててて
 ていよのまてとてとてとてとてとてとてとてとて
 か「海にわらよハまらるお光部とていをれんお光部
 実なる事ゆとてとてとてとてとてとてとてとてとて

めをせねばし金源とぞりゆくゆげぬ摩ろふ
 ろてめなり鬼月丸お光れの終りとはまより情
 物れ何ぞあれと夜のうらに恨とバじくえむ
 承りのそしあひのうりきり盃ぬお飲めぬお光
 も酔て外ぬお光もへおきり歌ゆけまけりお光
 鬼月丸亮亮のりぬていまりぬてる混金源ふ
 三切のぐれぬお光のりぬてお光の終るよの
 天井よありは天井のりぬてあかりお光
 眞とぶとまは是依お光とあまらふお光お光
 も五人お光のりぬてあかりお光お光

あが大事とあひく天井お光のりぬてあかりお光
 うりお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 うむお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 いぬお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 くお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 うてお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 まお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 ぬお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 うてお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光
 ひろお光のりぬてあかりお光のりぬてあかりお光

小立くゆづさおなり一野の牛れわあさる
中ふしたた放しと流るふ川あせてしれ
腋とらさやうてそ中よへく目斗見出くゆり
光あんれどく事りきり序衣よたかどぞん
うきる細^{ちほい}耐^{たへ}定^ま通^{とほ}季^き武^ぶホ^ほれ^れた^たふ^ふり^りを^をり^り
光る^くひ^ひく^くす^すの^の糸^{いと}と^と無^なわ^わり^り牛^{うし}の^の殺^{ころ}を^を
との^の牛^{うし}追^おお^おわ^わる^るとい^いわれ^れば^ば天^{あま}皇^みれ^れも
か^かか^かしく^{しく}と^とを^をて^て射^やり^り滅^めよ^よ無^なる^るぞ^ぞ足^あす
そ^そ牛^{うし}の^の細^{ちほい}い^いと^とあ^あん^んと^とぐ^ぐり^り糸^{いと}と^とぬ^ぬと^とぞ^ぞ死^しす
牛^{うし}小^{ちひ}じ^ぢく^くひ^ひく^くら^ら流^{なが}り^り入^いり^りあ^あや^やし^しと^とる^るあ^あり

牛れ腋のやぶ^{やぶ}さ^さく^く糸^{いと}と^とあ^あり^りく^くる^るに^に死^しす
牛^{うし}ゆ^ゆしく^{しく}と^とら^らく^くた^たく^く腋^{わき}の^の肉^{にく}より^{より}大^{おほ}の^の量^{りょう}打^うち^ち
と^とぬ^ぬと^とぞ^ぞ知^しく^く光^{ひかり}ふ^ふか^かり^りき^きり^り足^あれ^れば^ば鬼^{おに}同^{どう}死^し
と^と多^たり^り射^やり^りす^すと^とま^まは^はが^がく^く射^やり^り大^{おほ}き^きく^く不^ふ
向^{むか}ひ^ひ多^たり^り光^{ひかり}の^のあ^あは^はと^とさ^さが^がぶ^ぶた^たか^かと^とぬ^ぬと^とぞ^ぞ鬼^{おに}同^{どう}
丸^{まる}が^が影^{かげ}を^を打^うち^ちと^とし^しき^きり^りな^なが^がて^てと^とあ^あら^らじ^じと^と打^うち^ちと^と
ぬ^ぬと^とぞ^ぞ射^やり^りす^すと^とさ^さが^がり^りて^て死^しす^すと^とぬ^ぬと^とぞ^ぞの^のよ
ら^らい^いは^はと^とら^らき^きり^りと^となん^{なん}死^しす^すと^とた^たけ^けく^くい^いは^はと^と
ゆ^ゆり^りき^きり^り中^{ちゆう}に^に死^しす^すと^とら^らい^いは^はと^とら^らき^きり^りと^とあ^あや^や
ぬ^ぬ光^{ひかり}は^はそ^それ^れより^{より}保^{たも}つ^つを^をる^る。保^{たも}つ^つ守^{まも}り^り源^{げん}光^{くわう}の^の下^{した}

貞任宗任とせしむる隆興ふすまのれ長秋と還
 々の孫守府とせしむる秋田の城ふらりなるに書あり
 て軍れ於のこの澄らぬ白ゆふぬにたり長河に
 敏男とく川をせれば橋とててて曹小かき
 然とくみく考我り貞任ふとえどしてつわり
 城のうらりりのがきあきり一男八橋を命義家
 衣川不追とせせめあせとておくもしり成えき
 めくれとて川をせ物いんとていれらるをれど
 貞任ふらりらるる
 衣のここのわらびあきり

とりのきり貞任の川をせ成やきりてきりをあり
 むきり
 年成へ一糸のきり
 とけりきりその時義家とげりる案とてり
 一とゆふたりきりれとてくひの巾ふる
 くりきり半くれ
 同部ト十二年の合戦の後宇治へ来りて我れ方の
 物終やきり成は房はとてきりて終へり
 武者ふれ九に守れりてきりねと独りていれ
 きり成義家とて未だきりてけりて成の終ふ

人多し初めひりきり玄形小の陣出れぬる
やがて義経も知らるに而亦ある事とそそのま
つれと寝をれんきとそそく極わんとてひて車
小のくまきるをいそみよりて今夫せられきりや
がて守子ふぬくそれよりつひは細くて
られきりそ後永保の合戦其時金次郎の誠とせあ
きりた一歩の度飛りて前回の面ありありと
志きりた極ふぬくよりしてはく成みよりて飛陣
成陣軍のわやとてくつひは成りきりて是年
の義経つるより義経軍野は休し討つる
成陣軍

成陣軍のわやとてくつひは成りきりて是年
の義経つるより義経軍野は休し討つる
成陣軍

怪人かゝりてゆくをりよなはし小柄にぞ
うぶとぞありきらひらゝの種をさるん一足
走りの義あるやうりゆりゆいとぬいてさうし
とおひりけきり種をさるんハむじんなりとぞはね
れ舞の身成きりさぬにきりて種をさるんハ
の前れ土ふさりふきり種をさるんハさるんハ
まゝく度ぐて死より宗任さるんハさるんハ
わげくさるんハ種をさるんハさるんハ義
さるんハ種をさるんハさるんハさるんハ今
いとゆえんを耐へるんハさるんハさるんハ

なぐつゆのせをればやうて宗任してさるんハ
れきり他の節もさるんハさるんハさるんハ
種をさるんハさるんハさるんハさるんハ
の風胸をさるんハさるんハさるんハさるんハ
也れのひささ宗任もわらぶゆきとぞかゝるんハ
宗任ハ義あるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ
宗任ハさるんハさるんハさるんハさるんハ

二五八

二

ころをり宗任の仲門はゆきり又月雲の雪雲を
 けけ感ごとくあてあかり神なりておそるる一こ
 幸那のいひくはもことわらんぞんとおひるお
 小のんのどく強盜千人に海ひまおきり門の
 あよふをそびひくも此城をり一海けり見
 多バホ人半は宗任いりもろくおひるおひる
 小守門の下より女足をもおひるおひる
 狂らひえひひさめ城りて城なりをらん女ひし
 てまひくも死くも一海をなげて西にさしお
 矢つごごごごか城なりをりも耐義宗部下能ひそ

と何よりをれど宗任とあひりしり矢つごれを
 さてそも一しをれといそれる強盜たけし
 勢城はくく八まん友のありま一をりぞあぬを
 一とそもあくあげうせは海とあん
 月影長あうり小わ系法那の書城密合し
 かり件せんの女れ赤二系能濃るんをり築比つらり
 機安えんとけりりけく機安のまへ小地ほりてま
 ともは蘇そを城うへりをりまらう武勇なる
 法那をりをれど用ふるどあをるおへ法那の
 ともは蘇城うへひてあけくくの海れり

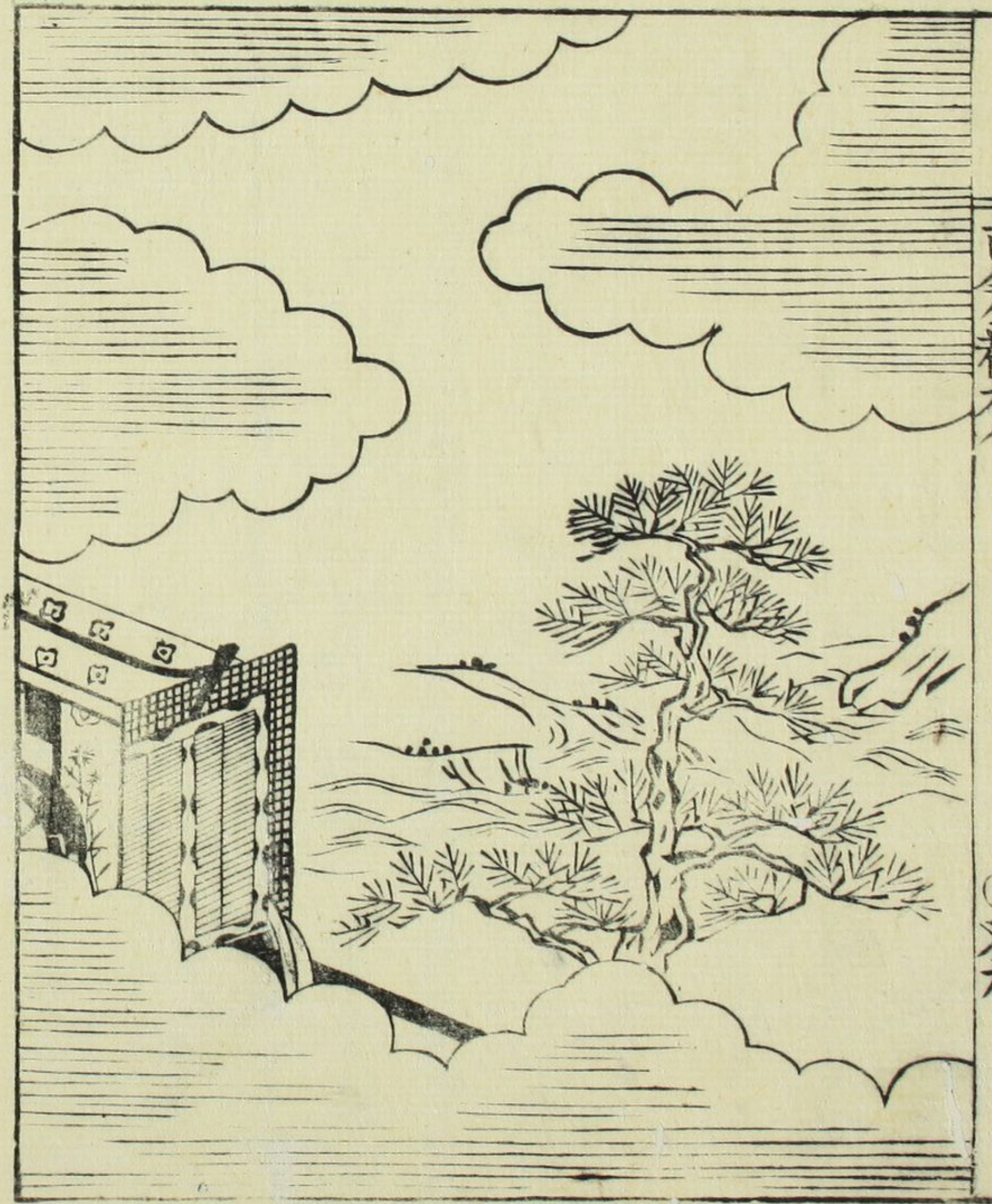
へ車成りせされば女扱とらなれ志とて成わげくまされ
と扱とらわげきりて付とびの尾より越入よきあり
海のひろきも海もゆるらんき海もとび入せん
ともわぎの程たけ凡夫の事ことわふあはだびりあひひ
さありふきれむ法師ほうしあつきて書とあのみ
せとめてゆきればありのまのたひひてきりさ
ハまのりさうん家いへあはうとらひく件くだの男紙
入まきひひきればのうれがと船ふねくついでいあまにいと
うきね扱とらなせわけくまのりかうふらんあそ
とらんとくくは法師ほうしをくは曲まが基もと盤ばんのあり

とて楯のやうよきくそねふきまづつせんとくま入
てを力ちから減へぬさてまのりあな事案のどく車とくを
きれど女むすめまのりさふ志こころけりふとびのどの方かたより
とび入るふものさぶらぶらとやらのされを力ちから減へ
ひきこらめて扱とらりきり減へぬさてとびさあり
基もと盤ばんの角すみ減へぬさ付つ斗と減へりけりさく海うみり船ふねく
まのりく入いるきり法師ほうしとて人ひとふあはだとあひ
ひにほしとまおくおそわくをさくまればさふ
くくくまおらしてわげよきりさうくくをさく
八は後ごを命いのちあはれきりさうくおくはあはれ

あつしきり

九郎判官義経様存大おの勲氣の男が旅あらし西
れくさめきり時とまの娘源次馬允番のこま
より半の中成ひひたれはのちうきと道おり
きり後ふと事字あつく番屋楽へめされく
わづけしきふきり十二のさめられしきり番
中きととりて今日やさうきんごんとかまらきり
去程ふお大おる藤西へ去りし時の追付はふのま
那の成り大まをきむひきり大お家のこま物ふ
て明官者用といえれり番屋のそや西へ西へ





古今卷九

九

知れぬるそのいそはひのそり
 上流の時はまがまが書が妹小とのいそはひのそり
 雲をよ下向をけまが書が親親而末大悦成なり
 さりとも今いたる度れ百餘の由りこれ後めんといはれ
 里をりなをなを常縁ありといはれ上をりかのいそはひ
 おもはれといはれわをちゆかひななりいそはひあり
 中流のそりといはれいそはひの油もほろりいそはひあり
 下流のそりといはれいそはひの油もほろりいそはひあり
 ひそりといはれいそはひの油もほろりいそはひあり

古今卷九

九

のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 志六のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 ゆくーのあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 二度同軍ふゆりこび書人のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 後アふくはゆづる書人のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 まるゆのあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 射より細小入るのあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 さげいゝあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 後盛入るのあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 と合宿とくろきりこび書人のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を

きれは身運をカハぬておもひくおまぬ川きく
 後苑(とろ)をたぐ捨置より隣へてあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 迹ふとくろきりこび書人のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 さこまざる身運をカハぬておもひくおまぬ川きく
 あひく合宿とくろきりこび書人のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 命とらわむまどきれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 志の射義盛が合戦の付るのあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 るに系あつる身運をカハぬておもひくおまぬ川きく
 軍のさたをくけざるあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を
 の詞よ合宿とくろきりこび書人のあはれは夜の合戦ふらぐしそて僅る難を

まねて自害してさう

兼久三年のみでこれより宇津文越中うづのの筋司すけが業のぬ

どを官くわんなりきとほぐ宇津川とてとてとて押おしる

せそ水の産たこへ入いるもろに石いしより死しつげく糧かぬ

ぐんとあせらるが上うへ帝みかどあてとけざりせれん引ひららる

てゆぶておろこころのきりきりしし毛けをぬれ川の産たこ

あくゆりぬりまひらるるゆくし中なかへさるる

かりきり

弓ゆみの筋すぢ 月十三

弓矢ゆみやのくさるる勢いきほひも一也ひとしも菊きく上うへ強つよく月つき出いる

不ふ再また控かへ夫おとこ不ふ虚うそ教しよ百ひゃく中ちゆう巨こく上うへの久く傳でん考かう参さん

延の中ちゆう又また年ねん四し月げつ十じゆ日にち強つよ心こころ親おや王わう内うち裏うらあてあせられあけ

口くちにせむ勢いきほひ給たまむ酒さけををどどそくそく又またししままららん

法ほつ源げん友ゆうのの東ひがしにに廟みやうああくく又またゆゆららるるああゆゆるるをを

親おや王わう守まもるるののららゆゆららるる二に品しん親おや王わう法ほつ費ぎ民たみののひひああれ

人ひと々々ももははききりり女むすめ禁かぎ米こめ一ひとつつひひううけけぬぬははぬぬれれりりせ

多おほ少すく強つよ心こころ親おや王わうののままととりり給たまひひよよせせりり揚ありりけけりりをを

々々りりささららるるののままけけわわぎぎハハカカららふふくく志こころ強つよされ

本ほん曆りき二に年ねん二に月げつ十じゆ七しち日にちああとと人ひと十じゆ余よ人ひと時とき々々々々々々

下したりりゆゆららるるははああののああぬぬははぬぬととあありりゆゆららるるははぬぬ

下したりりゆゆららるるははああののああぬぬははぬぬととあありりゆゆららるるははぬぬ

法源友

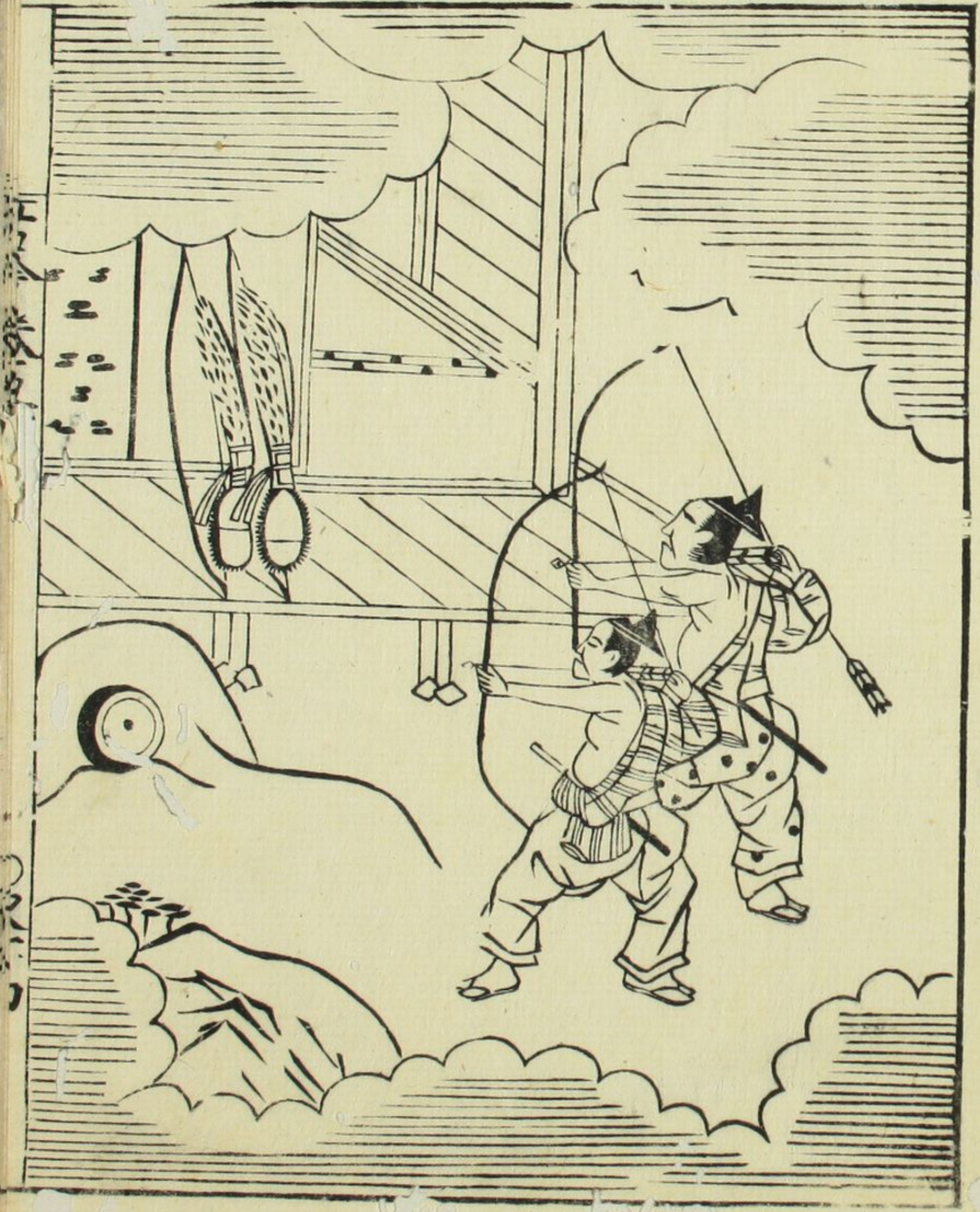
月十三

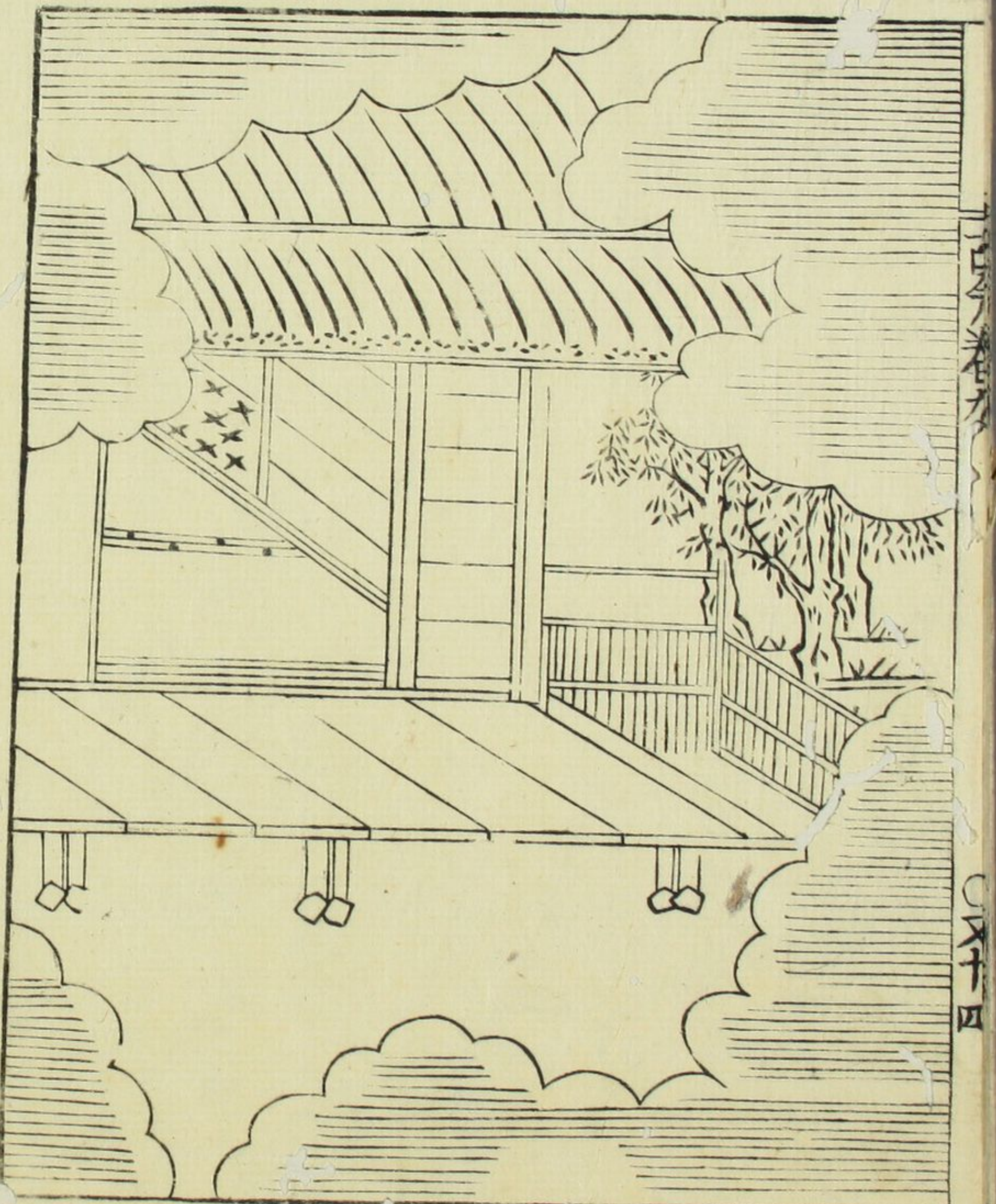
ざり又蹴鞠もまきりたり及て活とまありきき
 むひさ慮仲より管治の所調度とせられりされ
 べ別待所雑務の身もまきり又和安もまきり
 とちやびうらうくむせざる半のやうく面白き
 のことありきりのみどりきりせし

寛治八年八月三日御に大極殿申て懸らまきり
 おれ方の近辺の物衣履ぞとよりきりうぬく
 御せよりきり故人あも備へまきりんごほの衣
 冠あくまきりきり七双とてく鹿皮とけ物え
 一度射とてまきりきりわくごりきりい

けりりきりりく物衣履外下れ御承事武官は
 の物もまきりきり武官の物もまきりきり
 まきり射とてまきり射の物もまきりきり
 とうら射とてまきり射の物もまきりきり
 え射とてまきり射の物もまきりきり
 うまきり射とてまきり射の物もまきりきり
 けり射とてまきり射の物もまきりきり
 空めておれり射の物もまきりきり
 とり射とてまきり射の物もまきりきり
 り射とてまきり射の物もまきりきり

此物は後一人うかひてんきりての換あれども
 あれなくあひくまひくまあらきりされたるの服
 のちこみ守斗のほくまがれなきれば事成まじりて
 物成のまじりゆくのかえささるいあまさくまひく
 と後今一度お給て一さの座をうねまに又あま
 事成物成とさくまあくまほくまはなりのま
 ちひくまあひくまあらきりて事成まじりて
 右の服（おとこ）又守斗のほくまがれなきれば事成まじりて
 さればこそ守斗のほくまがれなきれば事成まじりて
 おりよれんか。そのおられん人のあやとていふ





室あて一人中はあてしをたすま申どうしとあてい
 とていしそこそいおらるあてすのいあてい
 侍りしやうのゆかばい申さそていそい射給りあて
 いふまれば秀武おあていりあていあてい
 一院多御池よりつとせあつ一申を給みこと目ざん
 ちいそ池の秀武あていりわが目そと射とせんと思ふ
 てあていあよとれいゆと申を給みあていあてい
 ひまの百おあていりあていあていあていあてい
 てあていあていあていあていあていあていあてい
 多池の鳥をいりあていあていあていあていあてい

わいとうひくはうまる感一と物定なりきれど
 いあみうしきり形て別あましく可成成て事
 うりきり夫のりまてあてせりきり池の江のき
 おひてみさごとおひあよわんれどく事て難せ
 てわがりきり成て川村よりきれとみさごとへい
 船ぐら形飛りきり難六池よわらて腹白あてれ
 うりきり別えわげく難候よそあへたれがみさごと
 勇成けりともう成是成いさううりきりも六馬四
 とれたたごらあまわの事とみさこれ瓜さあがけ
 あどあとももともあううねやうあし物定もきれと

くはううゆつりうりきり元史の馬さたわげと教
 感の由あり難候結りりきりとせん
 いし白あのみ射難夫成くさよとさうの物と水
 きりきり一きれどあおたふりや持つるこしは
 られどよああまていさうの上はあめくいさひさうや
 とみさごとあひひさわげと下人きりくさあし河さ
 少の固おとみいといあ成あて別らあ成あてせると
 きうきく南のさひさう成とああてとびくたああて
 けいどつぎまうのあがれとこいひさるんあうあ成と
 くれさうといあ成あてせな別りさあてとああを

く如く河津南の岸の上流をたたりけり
川とくあらう海よあやまげに射せり
威真のわたりむ家といふ一海をら
つ海を射せりつるぞとらあは
ぞつどくぬきれいそ津あ近う
一うづ川お流くぬきゆるあん
地お射く射せり一これごとく
ぞいひるらふお射せり一
よはなり

同人の名も又新源新源とあらは上り

年の始より河射をに九夜
之あゆりつりきり空居く矢
不守あけせ元今二の矢が
用事形しとた名とあふの
かりまことゆきされ結つ
おふ志伝らんといふ成主人
を何ぞ半もまにとあひされ
んがく老ふゆりしつかり
らく川とくそれち事ら
て的まむらふなり結射
て的まむらふなり結射

りらわのぢいひもねだこのふか州あつてぢり母て
 ぢりぢりぢりふぢりぢりぢり
 或雨の筋う討ちたるに曉ふ及せねば筋のち筋
 正とさ中と人といひたるお湯とる事の筋筋あり
 ぢりけさて筋はさくといひたるの筋筋の筋筋
 正とさ中と人といひたるお湯とる事の筋筋あり
 んわぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり
 正とさ中と人といひたるお湯とる事の筋筋あり
 ぢりけさて筋はさくといひたるの筋筋の筋筋
 正とさ中と人といひたるお湯とる事の筋筋あり
 んわぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり

さぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり
 得るるよのあつた目せぢりぢりぢりぢりぢり
 んた事討平細網ハ筋ぢりぢりぢりぢりぢり
 叶ぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり
 ぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり
 正とさ中と人といひたるお湯とる事の筋筋あり
 ぢりけさて筋はさくといひたるの筋筋の筋筋
 正とさ中と人といひたるお湯とる事の筋筋あり
 んわぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり



古今著闻集卷之九

